

## 五〇年代～七〇年代の西ドイツにおける反ユダヤ主義 ——その克服？

高橋 秀 寿

### はじめに

「この国にユダヤ人はいないほうがいいですか」——ホロコーストを引き起こした国民に対してアレンスバッハ世論調査協会は五〇年代から六〇年代にかけてこのような設問をしている。どきりとさせるような問いではあるが、その調査結果（表1<sup>1)</sup>参照）はさらにショッキングなものだった。一九五二年一二月段階でドイツ市民の三分の一をこえるドイツ市民がこの問いに「はい」と答えているからである。六〇年代に入るとその割合は二割を切るようになったが、それでも依然として「未決定」の割合がきわめて高いことに私たちは注目しなければならない。ナチズムの否定を前提条件として建国された西ドイツ国家で公然と反ユダヤ主義の立場を表明する者は、公的生活から排除される危険を冒さなければならなかったからである。つまり、「未決定」と答えた人びとのなかには、そのような危険を冒してまで「はい」と答えることに躊躇した者の割合が高いと考えられる。したがってこの調査結果から私たちが強調すべきことは、「はい」の割合の高さの推移よりも、五〇年代から六〇年代にかけて「いいえ」と明言できた西ドイツ国民が三分の一ほどしかいなかったことであろう。

表 1

	52年12月	56年4月	58年5月	63年3月	65年3月
はい	37%	29%	22%	18%	19%
いいえ	20%	35%	38%	40%	34%
未決定	43%	36%	40%	42%	47%

このような反ユダヤ主義の高いポテンシャルを一挙に噴出させる事件が五九年のクリスマスに起きた。その晩にケルンのシナゴークの外壁に「ドイツ人の私たちは要求する、ユダヤ人出ていけ」という反ユダヤ主義的スローガンとハーケンクロイツが落書きされ、ナチ体制犠牲者に捧げた記念板には黒ペンキが塗りたくられた。犯人は極右政党、ドイツ帝国党の党員であった二五歳の二人の若者で、すぐさま警察によって逮捕された。この事件はテレビやラジオのニュースを通して伝えられ、クリスマスの静寂な雰囲気吹き飛ばした。休刊日と重なったために新聞は月曜日の二八日にその様子を大きく——『南ドイツ新聞』では犯人の顔



図 1

写真を、『フランクフルト・ルントシャウ』紙は落書きされたシナゴグの写真(図1)<sup>2)</sup>をつけて——報道している。連邦首相のK・アデナウアーをはじめとして多くの政治家がこの行為に憤慨を表明し、連邦大統領のH・リュプケは「かつてその名のもとで犯罪者が汚辱と醜態を重ねたドイツ国民」を代表してケルン・シナゴグに電報を打ち、教訓を学ばずに和解をぶち壊そうとする「時代遅れの者」に正当な罰を与えることを伝えた。<sup>3)</sup> 実際に連邦政府は、極右政党のドイツ帝国党を禁止する連邦憲法裁判所への提案をすでに二八日に検討しはじめ、<sup>4)</sup> 翌月六日には連邦議会に「民衆扇動法」のすみやかな可決を要求している。<sup>5)</sup>

しかしこのような報道と反応は逆効果を生んだ。ケルン・シナゴグ事件の模倣犯が出現し、反ユダヤ主義的な落書きの行動が西ドイツ全土に広がっていることを伝えた一月二/三日付の『フランクフルト・ルントシャウ』紙は、「クリスマスのケルン・シナゴグへの凌辱は西ドイツのほぼすべての領域に反ユダヤ主義的な逸脱行為の連鎖反応を引き起こす発端であったようだ」と指摘した<sup>6)</sup>が、その予想は的中してしまったのである。一月五日までに連邦憲法擁護庁は西ドイツで二八件の類似した犯行を確認しているが、さらに西ドイツ発のこの波は国境をこえて西欧各国を襲い、国外でも一四件の犯行が確認されている。<sup>7)</sup> その後も反ユダヤ主義の波はむしろ勢いを増し、大西洋と太平洋までもこえてアメリカやオーストラリアにまで届いた。西ドイツ国内では一月二八日までに六八五件の反ユダヤ主義的事件が西ドイツ政府の白書によって記録され、しかもその犯人の半数以上が二〇歳以下の若者であった。<sup>8)</sup>

ところが——のちに詳述することになるが——六七年六月の第三次中東戦争、すなわちイスラエルがカザ地区とヨルダン川西岸を支配し、シナイ半島とゴラン高原を軍事占領下に置く勝利を収めた電撃戦の「六日間戦争」が起きると、イスラエルのための義勇兵として四日間で一六〇〇人の西ドイツ人が志願し、「イスラエルのための援助」基金には一週間で三〇万マルクの寄付が振り込まれるなど、親イスラエルの風潮が西ドイツ社会に吹き出すことになる。その年の七/八月の世論調査では西ドイツ市民の五九%がイスラエルの側に立ち、アラブ側に立つ割合(六%)をはるかに凌駕した。それまでかなりの割合が「いない方がいい」と表明し、あるいは内心ではそのような感情を抱いていたが、西ドイツ人のユダヤ人に対する立場はここに至って大きく変化したのであろうか。これから五〇年代から七〇年代の西ドイツにおける反ユダヤ主義の歴史的な性格を分析することによって、その変化の実体と意味を探ってみよう。

## 第一章 反ユダヤ主義とユダヤ人イメージ

表2<sup>9)</sup>は、フランクフルトの研究機関が一九五〇年から五一年にかけて一六〇〇人以上の市民との面談を通して実施された意識調査にもとづいて、ユダヤ人に対する立場を年齢別にまとめたものである。まずここから、ホロコーストの実態が広く知れわたったこの時点でも、反ユダヤ主義的な傾向が根深く広範に残存していたことが確認できる。さらに年齢別で見ると、第三帝国のなかで少年期と青年期を過ごした世代において反ユダヤ主義的傾向が強く、ナチス時代に受けたイデオロギー的な影響が戦後に深く影を落としていることも確かめられよう。またこの調査は、農民のような旧中間層においてもっとも反ユダヤ主義的傾向が強いことも明らかにしている。<sup>10)</sup>

表 2

1950-51年時点での年齢	全体	～20歳	20～35歳	35～50歳	50歳～
1945年時点での年齢		～15歳	15～30歳	30～45歳	45歳～
非「反ユダヤ主義的」	28%	29%	31%	25%	30%
「親ユダヤ主義的」	10%	10%	4%	13%	15%
条件付きで「反ユダヤ主義的」	25%	18%	21%	32%	23%
「反ユダヤ主義的」	37%	43%	44%	30%	32%

それから一〇年後、反ユダヤ主義的行動の波が広がるなかでフランクフルト市民を対象に行なわれた意識調査（表3<sup>11)</sup>参照）は、戦後に社会化された三〇歳以下の若い世代において反ユダヤ主義に共感する割合がもっとも——したがって第三帝国で社会化された世代よりも——高いことを明らかにしている。しかし、前者の親世代に相当する四〇代の年齢集団は、たしかに反ユダヤ主義に共感する割合は平均以下であるが、反ユダヤ主義を明確に否定もしておらず（5%）、むしろこの立場から距離を取ろうとする傾向（五八%）が非常に強い。つまり、この世代の反ユダヤ主義は潜在的に強いにもかかわらず、その立場は明確に表明されていない。この事実は、H・リュッペ<sup>12)</sup>によって提示された「コミュニケーション的沈黙」概念によってうまく説明できるように思われる。彼によれば、西ドイツの国家と社会は、ナチズムの否定を基本的な理念としていたにもかかわらず、国民の多数がその理念を支持・黙認していたという矛盾を抱えていたため、この国家と社会がナチズムの過去を饒舌に語ることは、その広範な基盤を構成していた「多数」と敵対することを意味した。したがって、この過去を公的なテーマとして扱う控えめな態度は「その過去の主体を民主的な国家に統合することを試みる」機能を果たしたのだという。つまり、自己と他者の褐色の過去をあえて語らないことが、共産主義者や狂信的なネオナチを排除した多数からなる西ドイツ国民を形成する前提条件であったということになる。したがって、あからさまに反ユダヤ主義的立場を公言することはみずからの過去をさらけ出すことを意味し、それは西ドイツ社会のコンセンサスに抵触したのである。

この調査は階層分析も行なっているが、ナチスの支持基盤であった中間階級の下層において反ユダヤ主義に共感する割合（二三%）がもっとも高く、<sup>13)</sup> この階層に属している三〇歳以下の年齢層でその数字は三八%に上っているのに対して、その階層の三〇歳以上の年齢層では一四%に、他の階層の三〇歳以下の年齢層でも一五%にとどまっている。<sup>14)</sup> つまり、反ユダヤ主義の社会的基盤は世代間で戦後にも引き継がれていることがここから確認される。したがって、温存された反ユダヤ主義の基盤の上で、ナチス期に社会化された親世代は「コミュニケーション的沈黙」の戦術にしたがってその立場を明確に表明していないのに対して、その子供世代は戦後に社会化されたゆえにその戦術を必要とせず、親世代に代わってその反ユダヤ主義的立場を表明しているといえよう。

表 3

1960年時点での年齢		18-30歳	30-40歳	40-50歳	50-60歳	60-70歳
1945年時年齢	全体	3-15歳	15-25歳	25-35歳	35-45歳	45-55歳
反ユダヤ主義を明確に拒否	19%	19%	21%	5%	20%	25%
反ユダヤ主義から距離	41%	32%	38%	58%	47%	35%
反ユダヤ主義に賛否の反応なし	24%	26%	29%	24%	20%	22%
反ユダヤ主義に共感	16%	23%	12%	13%	13%	18%

前述のケルン・シナゴグ事件とその余波は西ドイツ国家・社会に大きな衝撃を与えたが、五〇年代半ばから意識され始め、その末には時代のキーワードとなっていた「過去の克服」は、この事件を通してきわめて重要な政治・社会的問題として認識されるようになった。たとえば、「反ユダヤ主義的な活動をする者は裁判によって罰せられるべきか」という世論調査の質問に、五〇年代には半数以下が首肯していたにすぎなかったが、六〇年一月にはほぼ八割の市民が刑罰を求め、その後もこの割合は大きく変化することはなくなったように<sup>15)</sup>、反ユダヤ主義者は政治・社会的に許容できない反民主主義者=反西ドイツ体制の分子であり、したがって西ドイツの国民共同体から排除されるべき存在であるというコンセンサスが確立されたのである。では、その後の西ドイツ社会で反ユダヤ主義は克服されたのであろうか。この問題をユダヤ人のイメージ、あるいはステロタイプの観点から検討してみよう。

五三年に公表されたユダヤ人のイメージに関する調査で、職業としての「よき医者」やポジティブなイメージとしての「知的」、身体的特徴としての「曲がった鼻」といった項目以外に、「商業民族」や「物質志向」、「暴利追及者」、「肉体労働の忌避」といった市民的な生活・労働倫理にもとづくステレオタイプがユダヤ人の特徴としてあげられている。<sup>16)</sup> このことは五五年に公表された前述のフランクフルトの研究機関の調査でも確認される。「ユダヤ人は肉体労働を避けようとする」、「ユダヤ人は不自然にすぐに金持ちになる」、「ユダヤ人はだます」といった項目が反ユダヤ主義的な偏見の上位を占めている<sup>17)</sup> が、この調査では市民とのインタビューで「私は体を使って仕事をしているユダヤ人を見たことがない。だから仕事をしているといっても、他の人にただただ寄生しようとしている。だからあの人たちはシャベルとツルハシを直接にを使って仕事をしないと思うよ」、「ユダヤ人は働かず (nicht arbeiten)、取引する (handeln) だけだから、私たちはあの人たちを好きになれない」といった発言<sup>18)</sup> を引き出している。<sup>19)</sup>

この傾向は六〇年から六五年にかけての調査でも確認される。ポジティブな「知的」のイメージとならんで、「搾取者であることが多く、他者の労働で生きている」や「汗水たらして働こうとはしない」、「誠実なビジネスマンではない」、「よいことをするときには、たいてい計算しているときだけである」、「ケチで、しみったれた」、「臆病だ」といった項目に多くが首肯しているのである。<sup>20)</sup> つまり、反ユダヤ主義が西ドイツ国民共同体に反するイデオロギーとして認識され、表立って反ユダヤ主義者を自称することがこの共同体からの排除を意味するようになっていくにしたがって、その立場を表明することは困難になっていた一方で、反ユダヤ主義のイデオロギーに社会・文化的な根拠と正統性を提供してきたユダヤ人に対するステロタイプのな人種的偏見は保持されていったといえよう。表1で示された「この国にユダヤ人がいないほうがよいか」という質問に対する「未決定」の割合の高さも、この保持を統計の上で示している。

このことは、「平準化された中間層社会」(シュルスキー)が復興を成し遂げ、その国民と国家を形成していく基盤を支えていたのもやはり市民的な生活・労働倫理であったことを考えれば、何ら不思議な現象ではない。また、西ドイツ国民が植民主義的な主体として形成されたこととも、ここでは密接に関わっているといえる。西ドイツ国民はプリミティブな水準にまで陥った生活水準を復興と「経済の奇蹟」によって「文明」の水準の上昇にまで引き上げ、その経済・社会・文化的な先進性を確認することによって、ふたたび植民主義的なまなざしを東欧世界に振り向け、西側同盟国の一員として国民共同体を形成していった<sup>21)</sup> が、この植民主義的な主体の倫理的基盤とその先進性の根本要因こそが市民的な生活・労働倫理であったからである。つまり、西ドイツ国民は自ら

の姿の陰<sup>ネ</sup>画<sup>ガ</sup>をまだユダヤ人に投影していたのである。

このような生活・労働倫理にもとづいたユダヤ人に対するステレオタイプは、六〇年代に強化された歴史的な啓蒙活動によっても修正されることはなかったようである。「屠られた羊」としてのユダヤ人犠牲者像は、堅実な肉体労働によって鍛え上げられた心身のイメージとはまったくかけ離れた「臆病」なユダヤ人像を存続させることになってしまったからである。しかし八〇年代初頭の世論調査によれば、たしかに「商売上手」といったイメージは根強く残っているが、「詐欺師」や「卑屈」、「エゴイスティック」、「怠惰」といった項目をあげる西ドイツ人は少数となっており、代わって「勤勉」が「知的」とならんで上位にランクされている。また七〇年代末の調査では、「ユダヤ人は金ですべてを操り、権力を行使しようとしている」といった経済的な反ユダヤ主義の見解に同意する割合が六〇年代に社会化された世代においてもっとも低いことが明らかになっている。<sup>22)</sup> このような転換をもたらしたのはいったい何だったのであろうか。

## 第2章 イスラエル国家建設報道と中東戦争

ユダヤ系ドイツ人としての身分を隠してベルリンで終戦を迎え、一時ドイツを離れたあと、西ドイツでジャーナリストとして働いていたI・ドイッチェクロンは、この転換をもたらした契機としてアイヒマン裁判の意義を強調している。しかし、この裁判そのものが転換をもたらしたのではなく、この裁判の報道を通してドイツ人はイスラエルを「独自の構造と独自の制度、独自の特有性をもった国家」として「発見」したのだという。とくに若い世代は、圧倒的な優位に立っていた敵を打ち破ることができる能力をこの国家に与えた精神に関心を抱いた。「非常に奇妙に響くかもしれないが、アイヒマン裁判はドイツ人とイスラエル人との接近に大きく貢献したのである。」<sup>23)</sup>

アイヒマン裁判以後もイスラエルでの国家建設を称える報道はつづいた。たとえば『ツァイト』紙の六四年六月にE・フォン・メルフェルトは、一四年前の国家創建から「何もない土地に」都市が大胆に建設されたが、このような「新しい都市の急速な建設は全世界に比類がない」と驚き、数の上では西ドイツが受け入れた避難民を凌駕している移住者を統合した「途方もない業績」に感嘆している。<sup>24)</sup> また、その年の四月に「朝空の星への旅——イスラエル、詩的な名前の国」と題する旅行記を寄せたメルフェルトは同紙で「勤勉に働き、不毛の土地を耕された土くれにどんどん変えて、砂を肥沃なものにしている」イスラエル人の姿を賞讃し、建設から一〇年も経っていない人口一五〇〇〇人の都市で出会った、非情で、勇敢で、理想主義的であり、進取の気性に富んだ想像力があふれる「パイオニアたち」を紹介して、ドイツ人ツーリストがこの人びとが築いた都市を訪ねることを薦めている。<sup>25)</sup>

実際に五九年以後に青少年のイスラエル訪問が盛んになり、ドイッチェクロンによれば六五年までに四万人の若いドイツ人がイスラエルの国家建設を体験することになった。とくにキブツ訪問とそこでの労働体験はこの若者集団には「有益であると同時に、教育的」であった。そして親が子供をイスラエルに送った理由の一つも「わがままな若者が労働の恵みを経験できる」ことにあったという。「正しいことを始めることができない問題児」はこの経験を通して生に意味を感じ、「どんなわがままな若者も規則正しい労働に慣れ、厳しい規律に自発的に服した」からである。キブツは「規律と服従と共同体への順応を植えつける場」としての軍務に代わる役割も果たしたのだという。<sup>26)</sup>

キブツはイスラエル報道のなかで盛んに紹介されたが、ドイツ人が戦後に失ったか倫理と美德がこの「没我的」な共同体では実践されているかのように、その姿は以下のように描かれた。

「この集落の構成員は個人的な利益を断念しており、ここでは高い知性がピューリタンの禁欲の力と調和させている人間が生活している。」<sup>27)</sup> / 「願望や誘惑の制限、物質的な魅惑に対する規律化、人間の結びつきが全般的に失われている時代に最高度の結集を実行する試みにその本質があるこの生活形態——この生活形態には知的に非常に優れた人間だけが耐えられるように思える。すべての私的なことと個人的なことを断念するこの試練に小市民が合格することはないことは確かである。」<sup>28)</sup>

しかし、ユダヤ人のイメージが転換する決定的な契機を与えたのは六七年六月の第三次中東戦争、すなわちイスラエルがカザ地区とヨルダン川西岸を支配し、シナイ半島とゴラン高原を軍事占領下に置く勝利を取めた電撃戦の「六日戦争」だった。『シュピーゲル』誌は六月一二日号でイスラエルが「ナセルをナイル川の深い嘆きの谷に突き落とした」この戦いの勝因を兵器ではなく、兵員に求めた。イスラエルのパイロットは卓越した技術者である一方で、多くが寄生虫に罹った農民から徴募され、軍事訓練で右手と左手の違いを教えなければならない水準の兵士によって構成されたエジプトの軍隊には、士気も連帯感もなく、敵が近づくと将校は故郷の方向にジープで逃げていったという。<sup>29)</sup> 四日後の『ツァイト』紙も同じ見解だった。アラブ諸国はイスラエル軍を数的にはるかに凌駕する兵力を備え、軍備も文句のつけようのないものであったにもかかわらず、闘争意志を欠いていたのに対して、厳しく訓練され、高い闘争精神と連帯感を有するイスラエルの軍隊は「国民が存続できるかどうかは国民の規律ある態度次第であるという考え」に満たされていたというのである。<sup>30)</sup>

この軍隊を表象 = 代表していたのが国防大臣の M・ダヤンであった (図2は前掲『シュピーゲル』誌に掲載された写真)。六月九日に『ツァイト』紙は、この電撃戦によって「シナイのライオン」の称号を得たダヤンを「強靱なタイプで、冷笑的なユーモアを力強く発する無鉄砲な人物」と評し、ヴィシー政権軍との戦闘で負傷した片目を黒い眼帯で覆う「二〇世紀の海賊」の経歴を詳しく紹介して、「多くの戦闘の砲火が彼を「鷹」に鍛え上げた」と評している。<sup>31)</sup> このようにダヤンは報道を通して、ヒトラー暗殺計画の実行者であったシュタウフェンベルクと非常に類似したタイプとしてドイツ人の前に姿を見せた。「屠られた羊」としてのホロコースト犠牲者のイメージが典型的な「受動的犠牲者 (victim)」像であったとすれば、ダヤンはユダヤ人がいまや「能動的犠牲者 (sacrifice)」となったことを実証していたのである。<sup>32)</sup> そしてこの戦争をそののちも表象 = 代表することになる一枚の歴史的写真 (図3) が生み出された。<sup>33)</sup> 長らくヨルダンによって占領されていたヨルダン川西岸地区の「嘆きの壁」前に立つイスラエル兵の写真であ



図2



図3

る。おもに九〇年代から〇〇年代にかけて高視聴率のテレビのドキュメンタリー番組を制作しつづけたことで知られる G・クノップは、『歴史を作った写真』のなかでこの写真を——W・ブランド首相のワルシャワ・ゲットー記念碑の前での跪きやヴェトナム戦争での路上処刑などの写真とともに——戦中・戦後の歴史的写真の一枚として選択しているから、この写真は今日でもドイツ人の記憶に深く刻みつけられていると言ってよい。<sup>34)</sup> そこに写し出されているのは、命を賭けて使命を果たした「英雄」たちの凛々しい姿であった。

この戦争に西ドイツ国民は大きな反応を見せた。六月五日に戦争が始まると、イスラエルのための義勇兵として四日間で一六〇〇人の西ドイツ人が志願した。イスラエルは外国人兵を採用しなかったのでこの申し出は実現されなかったが、「イスラエル国民が民族殺戮に脅かされているときに私たちは黙っているわけにはいかない。イスラエル国家は、私たちの国の出身で、ドイツ人によって実行されたヨーロッパ・ユダヤ人への民族殺戮を逃れた多くの人びとの最後の故郷である」と呼びかけて設立された「イスラエルのための援助」基金には一週間で三〇万マルクの寄付が振り込まれ、私人と企業から医薬品などの援助物資の申し出がつづいた。<sup>35)</sup> ドイチュクロンによれば、この戦争が始まったときドイツ人はそれが「自分たち」の戦争であるかのようにふるまったという。何百という催しでドイツ人はイスラエルとの連帯を表明し、「戦後史のなかでドイツ人がこれほど感情に任せて、自発的にユダヤ人の側についたことはなかった。」<sup>36)</sup> 実際、この戦争をきっかけに中東問題における共感はいすラエル側に大きく傾いていることを以下の世論調査（表 4<sup>37)</sup> 参照）は示している。

表 4

	65年3月	67年6月	67年7/8月	70年5月	71年4月	73年4月
イスラエル側	24%	55%	59%	45%	43%	37%
エジプト側	15%	6%	6%	7%	8%	5%
どちらにも立たず	44%	27%	27%	32%	29%	37%
未決定	17%	12%	8%	16%	20%	21%

## おわりに

結局、ユダヤ人のイメージが転換したのは、ディアスポラ状態にあったユダヤ人の「過去」のイメージが歴史的な啓蒙によって変更されたからでもなければ、反ユダヤ主義の根拠となった価値観である市民ビュルガーリッヒ的な生活・労働倫理が希薄になったからでもなかった。建国を達成したユダヤ人がまさしく市民ビュルガーリッヒ的な生活・労働倫理にもとづいて国家を築き、規律ある国民の生活と身体を形成し、それを駆使して国家・国民のために勇敢に戦い、先進的な生活水準を獲得していった能動的犠牲の姿を目の当たりにすることで、西ドイツ人は自らの姿の陰面ネガとして映し出していたユダヤ人像を反転させ、陽面ポジのなかでユダヤ人をイメージすることで、両国民の共通性を確認していったからであった。つまり、ドイツ人を「反ユダヤ人」にしていった評価の基準軸は、この国民を「親ユダヤ人」に変えていったそれと同じものだったのである。

この当時の西ドイツ人が、イスラエルのユダヤ人に共感を示したとしても、ホロコーストにおける受動的犠牲者としてのユダヤ人の運命に——ほかの国民と同様に——さほど関心を示さなかった

ことはここから理解できるであろう。ホロコーストへの関心が世界的にうねりとなって広がっていくのは八〇年代以後のことであるが、それには社会的な変化が関わっていた。つまり、ドイツ人を「反ユダヤ人」にも、「親ユダヤ人」にもしていった評価の基準軸そのものが大きく変化した。西ドイツの社会体制がフォーディズムからポスト・フォーディズムに転換していくなかで、<sup>ビュルガーリッヒ</sup>市民的な生活・労働倫理が効力を減じ、その抑圧性が強調されていくと同時に、「能動的犠牲者」ではなく、「受動的犠牲者」が歴史的主体へと持ち上げられていったのである。<sup>38)</sup>

## 注

- 1) Elisabeth Noelle / Erich Peter Neumann (Hg.), *Jahrbuch der öffentlichen Meinung 1957*, Band 2. 1957., S. 218.
- 2) *Frankfurter Rundschau* (=FR) vom 28. 12. 1959.
- 3) *Süddeutsche Zeitung* (=SZ), FR, *Frankfurter Allgemeine Zeitung* (=FAZ) vom 28. 12. 1959.
- 4) SZ, FR, FAZ vom 29. 12. 1959.
- 5) FAZ vom 7. 1. 1960.
- 6) FR vom 2/3. 1. 1960.
- 7) FAZ vom 7. 1. 1960.
- 8) Vgl., Peter Dudek, „Aufarbeitung der Vergangenheit“ als Erziehungsprogramm? Über die Schwierigkeit, antifaschistische Jugendarbeit zu begründen, in: *Neue Praxis*, 12 (1982).
- 9) Friedrich Pollock, (Hg.), *Gruppenexperiment. Ein Studienbericht*, Frankfurt am Main 1955, S. 168.
- 10) *Ibid.*, S. 170.
- 11) Peter Schönbach, *Reaktionen auf die antisemitische Welle im Winter 1950/1960*, Frankfurt am Main 1961, S. 54.
- 12) Hermann Lübke, *Der Nationalsozialismus im deutschen Nachkriegsbewußtsein*, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 236, 1983.
- 13) Schönbach, *Reaktionen auf die antisemitische Welle*, S. 68.
- 14) *Ibid.*, S. 77.
- 15) Elisabeth Noelle / Erich Peter Neumann, (ed.), *The Germans: Public opinion polls, 1947-1966*, Westport 1981, p. 192. Bergmann, *Antisemitismus*, S. 270.
- 16) Kripal Singh Sodhi / Rudolf Bergius. *Nationale Vorurteile. Eine sozialpsychologische Untersuchung an 881 Personen*. Berlin 1953, S. 41.
- 17) Pollock, (Hg.), *Gruppenexperiment*, S. 164.
- 18) *Ibid.*, S. 166f.
- 19) この偏見に関しては、Wolfgang Benz, *Das Bild vom mächtigen und reichen Juden*, in: ders., *Bilder vom Juden. Studien zum alltäglichen Antisemitismus*, München 2001.
- 20) Elisabeth Noelle / Erich Peter Neumann, (Hg.), *Jahrbuch der öffentlichen Meinung 1958 - 1964*, Band 3. Allensbach, 1965, S. 216f. Badi Panahi, *Vorurteile. Rassismus, Antisemitismus, Nationalismus... in der Bundesrepublik heute. Eine empirische Untersuchung*, Frankfurt am Main 1980, S. 61. Vgl., Werner Bergmann, *Antisemitismus in öffentlichen Konflikten. Kollektives Lernen in der politischen Kultur der Bundesrepublik 1949-1989*, Frankfurt am Main 1997. の2章5の表6。Werner Bergmann / Rainer Erb, *Antisemitismus in der Bundesrepublik Deutschland. Ergebnisse der empirischen Forschung von 1946-1989*, Opladen 1991 の5章。
- 21) これに関しては、拙著『時間／空間の戦後ドイツ史——いかに「ひとつの国民」は形成されたのか』ミネルヴァ書房、2018年、第3章第2節を参照していただきたい。
- 22) Alphons Silbermann, *Sind wir Antisemiten? Ausmaß und Wirkung eines sozialen Vorurteils in der Bundesrepublik Deutschland*, Köln 1982, S. 134.
- 23) Inge Deutschkron, *Israel und die Deutschen*, Köln 1983, S. 140f.



- 24) Erika von Merveldt, Wüstenstädte als Oasen. Das israelische Spiel mit Experimenten. Beispiel für Entwicklungsländer, in: Die Zeit vom 19. 6. 1964.
- 25) Erika von Merveldt, Reise zum Morgenstern. Israel, Land mit poetischen Namen – Von Eilat nach Ajelet Hashahar, in: Die Zeit vom 24. 4. 1964.
- 26) Deutschkron, Israel und die Deutschen, S. 144ff, 158f.
- 27) Liselott Diem, Novalis in Israel. Sportimpressionen im „Altneuland“, in: Die Zeit vom 14. 6. 1963.
- 28) Marion Gräfin Dönhoff, Israel – wohin? Keine Macht der Welt kann diesen Staat mehr beseitigen, in: Die Zeit vom 14. 6. 1963.
- 29) Der Spiegel vom 12. 6. 1967, S. 21ff.
- 30) Oberst Hans Rudolf Kurz, So siegten die Israelis. Der Feldzug der sechs Tage im Urteil eines Schweizer Militärexpert, in: Die Zeit vom 16. 6. 1967.
- 31) Die Zeit vom 9. 6. 1967.
- 32) 「受動的犠牲者／能動的犠牲者」概念に関しては拙著『ホロコーストと戦後ドイツ——表象・物語・主体』岩波書店、2017年、とくに160-165頁を参照していただきたい。
- 33) Vgl., Die 60er Jahre und der 6-Tage-Krieg, in; bpb vom 28. 3. 2008.  
<http://www.bpb.de/internationales/asien/israel/45052/sechs-tage-krieg> (最終閲覧 2019年2月20日)
- 34) Guido Knopp, (Hg.). Bilder, die Geschichte machten, München 1995.
- 35) SZ vom 6. 6. 1967. FAZ vom 6. 6. 1967. FR vom 10. 6. 1967. Die Zeit vom 9. 6. 1967.
- 36) Deutschkron, Israel und die Deutschen, S. 336ff.
- 37) Michael Wolffsohn, Deutsch-israelische Beziehungen im Spiegel der öffentlichen Meinung, in: Aus Politik und Zeitgeschichte, B 46-47. 1984, S. 20.. Ders., German Opinions on Israel, 1949-1986, in: The Jerusalem Journal of International Relations, Vol. 10, No. 4, 1988, P. 94.
- 38) これに関しては拙著『ホロコーストと戦後ドイツ』の第4章第2節を参照していただきたい。

(本学文学部教授)